

2014年5月11日

ブライアン・ブルエット牧師

クリスチャン経済における七本の矢-2

導入

今朝、皆さんお一人お一人を OIC に歓迎いたします。皆さんの笑顔が見られてとてもうれしいです。今日も、クリスチャン経済における七本の矢というシリーズを続けていきたいと思えます。先週来られなかった方のために振り返りますと、第一の矢は祈りの必要性和価値でした。先週おられなかった方のために復唱しますが、私にはこの教会での目標があります。私が目指すのは、この教会が神の愛を体験できる場所、愛されていると感ぜられる場所となるようお手伝いすることです。教会に来るだけでは十分ではありません。私たちが教会とならなければならないのです。

先週、私たちは健全な教会の姿を思い描きました。誰もが何かに関わり、誰もが歓迎され、体の一部となっていく健全な教会です。すべてにおいて神が称えられる教会です。また、ここに集う人々でいっばいの会堂を想像してください。神は、これらのことが実現するための土台を私たちに与えてくださっていると私は信じます。この教会が聖書の教えに根差したキリスト中心の教会となるよう、私は全力を尽くしたいと思います。七本の矢にたとえて、先ほど想像した教会の姿となるには何が必要かを見出したいと思えます。なぜ矢なのでしょう。これは聖書に則っています。

49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。

49:3 そして、私に仰せられた。「あなたはわたしのしもべ、イスラエル。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」イザヤ書 49:2,3

ここにあるイスラエルという単語はイエスを指します。矢筒の中にある矢は、神のみこころにかなう教会に見られる七つの特徴を示します。このみことばは預言であり、ここにある矢筒の矢は、後のイエスの教えです。その教えは、神を称える教会とはどのようなものかを示します。

2 本目の矢— 私たちは励ましを与えあう教会となるべきである。

私たちに励ましが必要です。それは、落胆と戦っているからです。落胆は泥棒のようなものです。喜びや平安、元気を私たちから奪います。今朝教会に来る前に泣いていた人もおられるのではないのでしょうか。神はそのことをご存知です。落胆とは、過去に対する不満、現在に対する嫌悪感、また将来についての不安などです。神に心を留めていない、神のお約束を信頼していない状態を表します。頼れるものがないと、私たちは状況にばかり目を向けてしまいます。落胆する気持ちに襲われると、それだけではすみません。落胆が仲間を連れてやってくるのです。その仲間とは、疲労、憂うつ、疑い、恨みなどです。落胆に襲われたら、励ましが必要です。今日の聖書箇所コリント第二 1:3-5 にはこうあります。

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。 1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうし

て、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。1:5 それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。(2 コリント 1:3-5)

この個所から励ましを受ける3つの要素を見ていきましょう。

#1 神があわれみと慰めの神であるという事実に励まされる。

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。(2 コリント 1:3)

この慰めはどのようにして受け取ればよいのでしょうか。イエスは昇天されたとき、私たちの慰め主として聖霊を送ってくださいました。

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。ヨハネ 14:26

また、神のみことばを読むと慰められます。

15:4 昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。ローマ 15:4

このようなみことばを読むと、神が私たちを励ましてくださるお方であることを思い出します。神のみことばには私たちに与えられた約束がたくさんあります。その一例は、イザヤ書 54:17 です。

54:17 あなたを攻めるために作られる武器は、どれも役に立たなくなる。また、さばきの時、あなたを責めたてるどんな舌でも、あなたはそれを罪に定める。これが、【主】のしもべたちの受け継ぐ分、わたしから受ける彼らの義である。——【主】の御告げ——」イザヤ書 54:17

私を攻めるために作られた武器が役に立たなくなると聞くと、励まされます。また、神が私の守り主でいてくださるといってお約束に励まされます。生きていると、敵が私たちを打ちのめして落胆させようとしていると感じることがあります。

#2 神が私の悩み苦しみをご存じであるという事実に励まされる。

1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。(2 コリント 1:4)

神は私たちの人生のすべてをご存知です。

121:8 【主】は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。詩篇 121:8

ある母親のたとえ話で説明しましょう。今日は母の日ですから、ぴったりのお話だと思います。ある母親が十代の息子に家の掃除を頼みます。掃除機をかけて、鳥かごをきれいにしておいてね、と言いつけます。息子はいやいやながら、わかったと答えました。掃除機をかけながら鳥かごに目をやると、そこにはペットのチップーがいます。そして彼は、ふたつともいっぺんに片付けられないかなとふと思いました。鳥かごも掃除機できれいにすれば、簡単

でいいのに…と。さて、どうなったでしょう。鳥かごに掃除機をかけている途中で電話が鳴ったので、ホースが鳥かごに入ったままの状態です。戻ってくると、チップーはいません。なんと、チップーは掃除機に吸われてしまったのです。彼はチップーを掃除機から取り出し、ほこりを払いました。それから洗面所で洗い、ドライヤーで羽を乾かしました。結果的に、チップーにずいぶん辛い思いをさせることになってしまいました。私たちが鳥のチップーのように感じることもあるのではないのでしょうか。ずいぶん辛い思いをして、元気がなくなるのです。

神は私たちの行くも帰るもご存じです。今朝、皆さんが教会に来る様子もご覧になっていました。パウロも人生の様々な局面で、慰めや励ましを何より必要としたことがありました。コリント第二 11:27 にはこうあります。

11:27 勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。コリント第二 11:27

パウロは、自分にも苦しみで眠れない夜があったと語ります。悩み苦しんで落胆しているときは、自分だけがそのような目に遭っていると思いがちですが、使徒パウロもそのような状況を経験したことがここで記されています。

マタイ 10:29-31 にはすばらしいみことばがあります。

10:29 二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。 10:30 また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。 10:31 だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。 マタイ 10:29-31

神の目には、私たちはスズメよりもっと大切な存在です。神はそれだけ私たちに気をかけてくださっています。神は私たちが大事にしてくださいます。エペソ 2:10 は、私たちが神の作品だと語ります。

#3 健全な教会とは互いに慰めあうことが当然とされる場であるという事実に励まされる。

1:4 こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。 **1:5** それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。 (2 コリント 1:4b-5)

神はすべての慰めの神です。しかし、その慰めは神から直接やってくるとは限りません。横の関係、つまり兄弟姉妹をとおして、慰めがやってくる場合もあります。人を慰めるというのは、非常な大役です。

10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。ヘブル 10:25

私たちが集まって交わる目的のひとつは、愛と善い行いをつづけるよう互いに励ますことです。この個所は、そのことを思い出させてくれます。会えば必ず励ましてくれる人が必要なときがあります。もしあなたの周りにそんな人がいないなら、私にその役をさせてください。

辛い目に遭っているのは自業自得という場合もありますが、だからと言ってその人を愛さなくてよいわけではありません。私たちが周りの人に慰めをあふれるほど注げるといえるのはすばらしいことではありませんか。とは言え、ない袖は振れません。だからこそ、私たちにも元気づけてくれる人が必要なのです。ここに教会の存在意義があります。

神は今この時に、励まし手をあなたのもとに送ってくださっているかもしれません。せっかく励まして、それを拒否されると甲斐なく感じませんか。元気がないままでいいのだろうかと思ってしまう。傷ついた人を慰めようとしても、それを拒むのです。多くの教会に言えることですが、毎週日曜日に教会に来ていても、お互いのことをよく知らない場合があります。袋に入ったたくさんのビー玉と枝についたぶどうの房には大きな違いがあります。教会にずっと通っていても誰にも気づかれないことがあります。これについて、ある大学生の例をとってお話したいと思います。あるところに、鳥類学を専攻する大学生がいました。期末試験が近づき、彼は必死に勉強しました。鳥のことならなんでも覚えました。色や巣の形状、渡り鳥の飛来経路、卵の色などすべてです。準備万端でした。試験当日、教室に入ると、そこにはなんと 20 枚の大きなポスターが貼ってありました。それぞれ、違った鳥の足の写真です。試験の内容とは、足の写真を見て鳥の種類を当てるというものでした。その学生は激怒しました。こんなばかばかしい試験のために、あれほど勉強したのかと。彼は教壇にいる教授のもとへ行くと言いました。「こんな試験受けられません。非常識です。」教授は答えました。「この試験を受けないと落第になるがいいのかね。」学生は「それでもこの試験は受けません」と言って、教室を出ようとしてしました。すると教授が「ところで君の名前は」と尋ねます。「教授のクラスは一度も休まずに出席しているのに、僕の名前もわからないんですか。」「知らない」と教授。学生は言いました。「じゃあ、靴下と靴を脱ぐので、当ててください。」

結び

傷を抱えたまま猜疑心に満ちた人生を歩む必要はありません。ひとりで泣かないでください。あなたの心の奥底にまで届く励ましがあります。神はあわれみと慰めの神です。私たちは神のみことばに慰めを見出すことができます。みことばにある約束が実現するという信仰が私たちに慰めてくれます。それだけではありません。私たちは教会ですから、ともに歩みともに礼拝する仲間に対して、積極的に励ましを与える存在であるべきです。たくさんの人がハグし合う様子がもっと教会で見られたらと願います。私たちは励ましを受けるだけでなく、励ましを与える人になりましょう。祈りましょう。